

# どう学ぶか、投資教育

子供たちが夏休みに入るシーズンである。筆者の子供の頃には、「夏休み帳」なるメインの宿題があり、毎日、算数の問題やら社会科の問題やら漢字の綴り方やらを勉強するようになっていた。夏休み帳以外にももろもろ宿題があるので、ゲンナリした記憶がある。

だが、そのようなことに負けないのが「良い子」たち。大体、夏休み帳は三日坊主で中断し、新学期開始ギリギリになって悪童同士が集まって、怪しげな解答を写しあったり、はたまた二週間前の天気を捏造したりしたものである。だから、夏休み中の昆虫採集や魚釣り、プラモデル作りはよく覚えていても、夏休み帳の内容は記憶から飛んでいる。

何を言いたい。要するに好きこそもの上手、であり強要された知識はなかなか脳中に沈潜しない、ということである。ここで考えさせられるのが投資教育だ。

証券投資、証券貯蓄の重要性は、当コラムをご覧の方々に多言は要しまい。しかし、投資経験のない方にいきなりレバレッジだ、ロボアド（ロボ・アドバイザー）だ、デリバティブだ、ノックインだ、と申し上げても宇宙語でしかない。まずは、実体経済と金融、つまり投資に関わる大きなマネーの動きを把握していただかなければならない。そうしながら、会社とは、企業金融とは、といった資金調達サイドのメカニズム、ライフ・ファイナンシャル・プランニングと財産の管理・運用、といっ

た資金運用サイドのポイントを整理していく必要がある。

ここまでは、基本的に経済と金融のマクロであり、会社法や金融商品取引法の枠組みの話であり、現物の株式や債券、投資信託のイロハである。

これらを踏まえてから、昨今のフィンテックやポートフォリオ理論やらに入っていくのだが、ちょっと待て、である。そこまできたら優に経済経営系大学院のレベルだ。このようなことまで要求したら、それこそ投資はほんの一握りの人たちのものになってしまう。そこで、せいぜい「基本知識」の水準までは、何とかしたいのである。

いわゆる投資教育の必要性が叫ばれて久しい。かれこれ20年ほどたつだろう。この間、ずいぶんといろいろな試みがなされてきた。

日本証券業協会を筆頭に小学校から大学までの出前講義や証券セミナー、社会人対象のシンポジウムや講演会、投資クラブの組織化や無報酬の証券アドバイザーの派遣等々が実施されてきた。個別証券会社も高校、大学を中心に多様な取り組みを行ってきた。しかし、その効果はどうか、という疑問の声もある。確かに家計ポートフォリオが大きく変わったわけではない。相変わらず少なからぬ政治家が株式投資を悪玉視する。投資教育はやってもむなしではないか、というわけだ。

筆者自身が、大学教員時代の10年間は投資教育に明け暮れた。おかげで教え子の3割弱が証券業界に飛び込んだ。そのような現場からの成功例

を少々ご披露したい。

まず、現在は証券会社に勤めているX君とY君のケース。X君は分かりやすかった。当時、憧れの職業になっていた投資銀行に入りたい、というのだ。彼は、筆者が講義に活用した、ウォール街を舞台にしたサクセス・ストーリー映画を見て、「僕も映画の中で投資銀行マンを演じるハリソン・フォードごとなりたか」と。ならばと筆者のゼミに勧誘し、かなりハードな課題を与えたのだが平気がついてきた。こういう学生なら話は簡単。

Y君の場合は、とにかく証券会社は給料が高く格好良さそう、人脈が広がり異性にももてるだろう、という思い込みが強かった。このタイプは難しい。証券業と人脈、モテ男かどうか、は無関係だからである。ゼミでは苦労していた。しかし、何の拍子か大手証券会社に合格すると、途端に真面目に市場や投資の勉強を始めるようになった。それなりに中堅社員として頑張っているらしい。

他方、甲さんは、聡明な学生なのだが、はなから「証券投資は博打よねえ」と言い出す始末。幼い頃から家訓として“株は絶対にやるな”と育てられたという。乙さんは反対に、日頃、父親がこれからは証券の時代だ、と言っていた。甲さんと乙さんは親友同士である。

筆者は甲さんみたいな学生こそ欲しい。そこでわがゼミ志望の乙さんに、甲さんへの説得を頼んだ。ゼミ志望者の中に甲さんの名前を見つけた時は嬉しかった。ところがその理由を聞いて愕然。「自分は銀行志望だが、これからは銀行も投資信託という証券会社の『預金』を扱うので、銀行に就職するために志望した」というものだ。

甲さんはさすがに優秀でゼミの中でもトップクラスだったが、市場や投資への興味は今一つだった。それが半年たつとガラッと変わった。講義外

の時間にも、ゼミ生たちと何やら熱心に討議している。テーマは確定拠出年金と証券市場といったもの。

「甲さん、どげんしょっと？」不思議そうにX君が呟いていたが、乙さんの説明で分かった。年末に東京で開催される全国学生証券ゼミナール大会にエントリーしたのだそうだ。秋の初めにテーマ論文の締め切り、12月上旬に東京は代々木のホールに全国のエントリーチームが参集、一泊二日の白熱したディベートが展開する。甲さんと乙さんは揃って大会に出席、優秀賞で表彰されたのである。

甲さんは言う「証券はわくわくするようなビジネスであり、経済の血管であり、そして人生そのものなんですね。ゼミナール大会でそれを疑似体験できました」

彼女は大手証券会社のエリア総合職として入社後、社内結婚をしたが、夫は程なく転勤。だが同社はこのような場合に、妻も夫の転勤先地域で仕事を続けられる。2子をもうけ、育児に一段落ついたらまた仕事に復帰したいと張り切る。

教訓。教育は相手がその気になるもの、つまり興味を引くもの、継続できるもの、でなければならぬ。言い換えると、自分にとって「お得だ」と感じるものである必要がある。

投資教育も同じだと思う。

[著者] \_\_\_\_\_

川村 雄介 (かわむら ゆうすけ)



副理事長